

**SHOW HEY**シネマール

★★★★★

**パッドマン 5億人の女性を救った男**

2018年/インド映画  
配給：ソニー・ピクチャーズエンタテインメント/137分  
2018 (平成30) 年12月8日鑑賞 TOHOシネマズ西宮OS

**Data**

監督・脚本：R・バールキ  
出演：/アクシャイ・クマール/ソ  
ーナム・カプール/ラーディ  
カー・アーブテー/アミター  
ブ・パッチャン

**👁️👁️ みどころ**

ハリウッドにはスーパーマンやスパイダーマン、そしてバットマンがいるが、ボリウッドにはパッドマンが！インドでは月経・妊娠・出産などを「不浄」とし、女性を男性よりも下等な存在に位置づけていたから、ナプキンの普及は遅く、それは高価な“雲の上の存在”だった。

そこで、パッドマンはナプキン革命のため、“変態おやじ”扱いされながらも大奮闘！離婚の危機、村からの追放等の試練の中、彼はいかなる努力を…？

そのサクセスストーリーも面白いが、ハイライトは彼の国連での演説。カタコトの英語で本音を訴えかけるその演説は、リンカーン、ケネディ、チャーチル、ヒトラーにも比肩すべき(?) アピール力がある。単純な映画ながら、こりゃ必見！



**■□■バットマンならぬパッドマンとは？■□■**

ハリウッドには、スーパーマンやスパイダーマンそしてバットマンがいるが、それなら、ボリウッドにはパッドマンが！しかし、パッドマンって一体ナニ？それは、インドで生理用のナプキン革命を起こし、国連で演説までした発明家であり起業家であるラクシュミカント・チャウハンのことだ。

1962年に女性差別の激しいインドの片田舎で生まれたラクシュミ(アクシャイ・クマール)は美しい妻のガヤトリ(ラーディカー・アーブテー)と結婚したが、生理期間中は「穢れ」期として女性は部屋の中に入れず、妹たちも廊下部分で寝ていることを知って、大衝撃！インドでも当時生理用ナプキンはあったが、それは一袋55ルピーで、メチャ高

い。そこで、ラクシュミは安価なナプキンを作ろうと一念発起し、変人扱い、村からの追放、離婚の危機等乗り越えて、1つ2ルピーのナプキンの発明に成功したらしい。

日本では現在、NHKの朝ドラでインスタントラーメンを発明した安藤百福をモデルとした物語が放映されているが、インドでは『マダム・イン・ニューヨーク』(12年)、『シネマ33』38頁)や『バーフバリ 王の凱旋』(17年)、『シネマ41』141頁)等に続いて、本作が大人気。なるほど、なるほど。

## ■□■この執念に注目！変人扱い！離婚の危機！村の追放！■□■

冒頭のラクシュミとガヤトリの結婚式での歌い踊るシーンを観ていると、インド映画が(ボリウッド映画)“先祖がえり”した感があるが、そこから始まるラクシュミの生まれ故郷でのパッドマンとしての“始動”ぶりは、夫婦の愛情にあふれた微笑ましいものだ。しかし、工房で熟練工として働いているはずのラクシュミが、仕事もそこそこに一人でケッタイなモノの開発に励んでいることがわかってくると、女たちの批判の目だけでなく、田舎村全体の批判の目がラクシュミに向いていくことに。そして、ある日、自らの身体で行った“ある実験”に失敗し、腰を真っ赤に染めた状態でラクシュミが聖なるナルマダー河に飛び込む事態になると、その批判は頂点に。妻のガヤトリはラクシュミの努力には理解を示したものの、村の習慣や世間の評判を無視することができなかつた。そのため、ガヤトリは女にとって最も“恥ずかしい”状態に耐え切れず、実家に戻ってしまうことに。

そんな状況下、ラクシュミは“石もて追われる”ように村から追放されてしまったが、この男の執念はすごい。インドールという都会の町に流れ着いたラクシュミは、そこで再び孤独な研究を始め、ついに本物のパッドマンになるためには、綿と布ではなく、セルローズ・ファイバーなる素材が不可欠なことを知ることに。するとその後は、その素材を手に入れることと、それを使ってナプキンを製造する簡易な機械を発明すること、が彼の明確なテーマになった。大手のナプキン製造メーカーは大規模な機械でオートマチック化して大量生産していたが、その製造原理は簡単だから、簡単で安い機械を作り、それを人手も交えながら使えばOK。それなら、きっと安いナプキンを作れるはずだ。そんな執念が実を結んだから、この男はすごい！

## ■□■出会い、人の和、そして成功へ！■□■

若き日の木下藤吉郎も若き日の明智光秀も、織田信長の直観的なカンによって仕官が可能となり、与えられたチャンスをモノにすることによって大成功をおさめていった。しかし、自分が作った安価なナプキンの試用者になり、意見を言ってくれる若い女性を求めているラクシュミの場合は、たまたまあるイベントの出演でインドールにやってきていたデリー在住の女子大生パリー(ソーナム・カプール)と知り合うことによって、ビッグチャンスを引き込むことに。

ラクシュミが試作品として作ったナプキンのお試し顧客の第1号となったパリーは、妻のガヤトリとは全くタイプの違う進歩的な女子大生だったうえ、父親がデリーの工科大学の教授という心強いバックもあった。そのためパリーは、ラクシュミをデリーのインド工科大学で行われる、発明コンペティションに出場させることを計画。それを受けてラクシュミが出場すると、見事に優勝し、優勝賞金までもらったからすごい。これは、私が愛媛大学法文学部の学生に対して行った「まちづくりの法と政策」と題する4日間の集中講義をまとめた『実況中継 まちづくりの法と政策』（2000年・日本評論社）を東京理科大学の渡辺俊一教授が面白いと認めてくれた上、社団法人日本都市計画学会「石川賞」に推薦してくれたところ、見事に受賞に至ったのと同じような、ものすごい話だ。この優勝がテレビで取材・放映されたラクシュミに対して、パリーはこれで特許申請をし、特許を取り、それを製造会社に売れば、あなたは一躍億万長者になれると説明したが、さて、そこでのラクシュミの選択は？

## ■□■ ゴーン会長は？産業革新投資機構は？丸選手は？ ■□■

年10億円と言われていた日産のカルロス・ゴーン会長の役員報酬は突出して高かったが、実はそれ過少記載だったという罪で彼が逮捕された事件は、世界中に衝撃を与えた。最新情報によれば、彼は12月10日に再逮捕されたが、その容疑は、平成27年から29年度の報酬が、実際は計約71億7400万円だったのに、計約29億400万円と、計約42億7千万円過少申告していた、というものだ。他方、日本だけの話題ながら、産業の競争力強化を目的に作られた、資金規模2兆円の国内最大の官民ファンドである「産業革新投資機構」は、役員の高額報酬を巡って役員と経済産業省が対立し、つい12月10日、田中正明社長ら民間出身の取締役9名全員が辞任したことが発表された。また、その少し前には、FA宣言をしていた広島カープの丸佳浩外野手が“5年、総額25.5億円”の大型契約で巨人軍への移籍を決めた。

これらについては、まずゴーン会長は、金融商品取引法違反で取り調べている東京地検特捜部の検事に対して犯行を頑強に否認し、反論しているそうだから、これから本格的に始まる刑事裁判の行方は予断を許さないはずだ。次に、産業革新投資機構の場合については、官と民がケンカ別れするに至った理由を明らかにするためには、もっと詳しい事実関係の解明が不可欠だ。ちなみに、田中正明社長は「国の将来のため、われわれが身に付けた金融・投資の知見・経験を差し出したいという思いで（機構に）来た。仮に報酬が1円でも来ていた」と語っているが、その真意は？第3に、丸選手も「カネのためではなく、自分に新たな試練を与え成長するべく巨人軍を選んだ」と語っていたが、その真意は？

私は、毎週日曜日の「サンデーモーニング」で“喝！”を入れている張本勲氏が、丸選手の巨人軍への移籍は、決して口には出さないが、結局はカネの問題だと解説していたことに同感だ。日本では、はっきり「カネのため」と口に出すホリエモンこと堀江貴文のよ

うなタイプは嫌われるから、丸選手のようにキレイに言わなければならないわけだ。そう考えると、田中社長の「1円でも来ていた」発言もあまりにもキレイ事すぎるだろう。しかし、ラクシュミの場合は・・・？

## ■特許申請で億万長者に？いやいや俺は・・・。■

すると、ラクシュミもパリーが勧めるように、村から追放され、離婚の危機まで迎えないがやっと発明した、格安ナプキン製造機で特許を取り、それを売って一躍億万長者に・・・？いやいや、「僕はカネが欲しくてその発明に取り組んだわけではない。それはすべて、インドの女性のため、村のため、国のためだ。」とラクシュミは言っていたから、彼の場合はきっとそれが真意のはずだ。

他方、ラクシュミの発明活動の支援をしながら自分のシューカツ（就活）もしつかりやっていたパリーは、“優秀”と評価されて大企業の“内定”を得たから、インド10億人の国民を代表する進歩派女性として前途洋洋。ところが、ラクシュミが特許を得てそれを売却するという道を選ばず、1枚2ルピー（約3円）のナプキンを作れる、1台65,000ルピー（約10万円）の機械を農村の女性たちに売り、そこで一台当たり10人の雇用を確保するというビジネスモデルを作り、それを実践していく道を選ぶと、パリーは？

本作前半はラクシュミの安藤百福ばりの発明家としての側面に、後半はラクシュミのホリエモンこと堀江貴文ばりの起業家としての側面にハイライトが当てられていく。安い簡易ナプキンの製造機を1台10万円で作って、それを女性の自助グループに販売し、女性の起業と意識改革を促すというラクシュミのビジネスモデルはオリジナリティあふれるすばらしいものだから、それに注目！本作に少しでも登場する実際のパッドマンことアルナーチャラム・ムルガナンダムは、その功績によって、2014年には「タイム」誌の「世界で最も影響力のある100人」に選ばれたほか、インド政府からは2016年にパドマシュリ褒章を授与されているそうだ。

また、そこですごいのは、パリーも大企業への就職の道を捨てて、ラクシュミの草の根運動のよきパートナーになる道を選んだこと。そんな道を選べば、たちまち銀行の融資は？今日どの村のキャラバンに？そこでの女性たち一人一人との対話は？教育は？その他、毎日大変なことだらけだが、なぜパリーもそんな道を選んだの？それは、ラクシュミのみならず、パリーもまさに、カネではない！国のため！女性のため！だ。

## ■故郷に錦を飾る幸せはモンモノ？それとも・・・？■

日本では今、12月10日（日本時間12月11日）にストックホルムで開催されたノーベル賞授賞式に羽織袴姿で出席した本庶佑京都大学特別教授の話題でもちきりだ。がん治療法において新たな道を切り開き、今年のノーベル医学・生理学賞を授賞した彼の日本式羽織袴姿は、1968年にノーベル文学賞を受賞した川端康成氏以来だが、彼の功績以

上に（？）世界の注目を集めた感がある。それはともかく、日本では“故郷に錦を飾る”という言葉があるから、彼も出身地の京都市“名誉市民”の称号を貰うのでは・・・？

そう考えると、インドでも、「おらが村からラクシュミのような有名人が出たのだから、彼に名誉村民の称号を！そんな動きが出てよさそうなものだが、どうもインドにはそういう風習はないらしい。ちなみに、『笑う故郷』（16年）は、ノーベル文学賞を受賞したダニエルが「名誉市民」の称号を受けるべく生まれ故郷のサラスに錦を飾る物語だった（『シネマ 41』266 頁）。しかし、彼は小説の中で故郷のことを良く書いていなかったため、さまざまな問題が噴出していった。また、元カノとの面会がさまざまな混乱を引き起こしたが、さて、ダニエルと同じように「故郷に錦を飾った」ラクシュミは？

故郷では、両親が「早く離婚届に判を押せ」と迫っていたにもかかわらず、心のどこかでラクシュミを信頼していた妻のガヤトリがそれを拒否してラクシュミを待っていたが、2人の再会は？もっとも、ラクシュミが大成功を取めたからといって、今更「ヨリを戻そうよ」とラクシュミにすり寄るわけにもいかないから、さてガヤトリは？そして、ガヤトリの家族たちは？また、あの当時のラクシュミを“変態おやじ”とみなして“石もて追った”村人たちは、今はそれを忘れたかのように180度方向転換してラクシュミを歓迎していた。これは世の常だが、そんなものを信用していると、またいつ足元をすくわれるかわかったものではない。そう考えると、ラクシュミにとって故郷に錦を飾る幸せはホンモノ？それとも・・・？

そんな風に「故郷に錦を飾った」ラクシュミに対して、パリーからもたらされた吉報は、なんと国連で演説してくれという依頼。これはラクシュミのインドでの安価なナプキンの発明と、簡易ナプキン製造機を作っては村々の女性たちに販売する活動が国連でも評価されたためだが、人前でしゃべったことなど一度もないラクシュミにそんなことできるの？

## ■国連演説に涙！vs チャーチル、ヒトラー、ケネディ■

本作は鑑賞前からストーリーも売り込みポイントもわかっていたので、ためらいつつ、時間の都合がいいので鑑賞したものだった。冒頭の歌い踊る結婚式のシーンから“変態おやじ”扱いされる中でのラクシュミの涙ぐましい努力を見ていると、それはそれなりに感動的。そして、パリーの協力を得てその努力が実を結び、国連での演説依頼に至ると、ラクシュミのサクセスストーリーはピークになる。しかし、パリーのようなエリート女子大生ならともかく、ラクシュミのような英語もろくにしゃべれない田舎者に国連での演説などできるの？そう思っていると、何の何の。その演説の素晴らしいこと！それを聞いていると、私の目からは涙がポロポロと・・・。

『チャーチルノルマンディーの決断』（17年）では、“チャーチル映画”が『ウィンストン・チャーチル ヒトラーから世界を救った男』（17年）（『シネマ 41』26 頁）に続いて2本も公開されたことにびっくりしたことと、その両者では、1940年の“ダンケルクの

戦い”と1944年の“ノルマンディーの戦い”におけるチャーチル演説がハイライトにされていることを紹介した（『シネマ 42』115 頁）。また、これらのチャーチル演説に対比する歴史に残る名演説として、リンカーンの演説やJ・F・ケネディの演説、さらに『チャーチルの独裁者』（60年）におけるチャーチルの演説、そして、1945年8月15日の天皇陛下の玉音放送を挙げた。

それらに比べれば、本作にみるラクシュミの国連での演説は個人的な業績の報告にすぎない。しかし、カタコトの英語を駆使して本音をズバリズバリと語りかける彼の演説は実に感動的で、素晴らしいものだ。日本では“今太閤”と呼ばれた田中角栄元総理は大学にも入っていないが、その演説は多くの人々を惹きつけた。それは彼の実体験を自分のナマの言葉で率直に聴衆に語りかけたためだ。それと同じように、ラクシュミが国連で語ったのは、あくまで自分の夢はインドで安価なナプキンを作り、女性たちにそれを提供したいこと、また自分は決して金は求めていることだ。本作のパンフレットにはその全文が掲載されているので、皆さんにはそれを熟読してもらいたい。とりわけ、私がそれを読んでもらいたいのは、前述した①日産のゴーン会長、②産業革新投資機構の田中社長、そして③読売巨人軍の丸選手だ。自分の生き方と対比しながらこれをしっかり読めば、さて彼らのこれからの人生は・・・？

2018（平成30）年12月14日記